

## アカデミア メランコリア (第24回) (若手のコラム)

IBS Center for Climate Physics, Pusan National University 山口 凌平

今年度6月より韓国の釜山にある IBS Center for Climate Physics (ICCP) にてポスドク研究員をしている山口 凌平と申します。尊敬する先輩との「ご縁」で、この若手コラムのバトンを受け継ぎ執筆を担当させていただきます。今このコラムに目を通してくださっている方の多くにとって ICCP ってなに？どこ？という感じかと思いますので、研究所自体の紹介を含め、こちらでの生活で感じたこと、最近の想いについて書かせていただければと思います。



IBS (Institute for Basic Science) は韓国政府が基礎科学研究の世界的拠点を作ろうと2011年に発足した研究機関です。その目標は基礎科学における知の発展と研究者の育成であり、そのために国内外から著名な研究者をディレクターとして招聘し、現在は数学、物理、化学、生命科学、地球科学分野の30のセンターで構成されています。そのセンターの一つが私の所属する ICCP であり、ICCP は2017年に当時ハワイ大学の Axel Timmermann 教授をディレクターとして設立された新しい研究所です。大気を中心とした気候科学から海洋物理・化学、古気候 / 古海洋学に至るまで、研究者20名程度という規模の割に幅広い分野の研究がなされています。韓国にあるといえど、所長を含めた研究者の半数以上が国外出身者で、私のデスクがあるポスドク部屋は7人で6の国籍というとてもインターナショナルな構成になっています。

研究所では二週間に一度、定期的にグループミーティングという名の研究道場？のようなものが行われています。グループミーティングでは所長と所属研究者全員が(とても狭い)ミーテングルームに会し、全員が全員の前で自身のプロジェクトの進捗状況話し、質問意見を受けます。基本的に一人の持ち時間はなく、朝から始まり全員が話し終わり次第終了なので、終わる頃にはその日の勤務時間が終わっていることもしばしば。私はというと、慣れない英語に博士課程とは異なる研究テーマでの試行錯誤と、日々圧倒的無力感に打ちひしがれながらもなんとかやっているという状況です。

こちらに赴任して4ヶ月ほど過ぎましたが、ご存知の通り現在の日韓関係はとても良いとは言えず、多くの日本の方から「大丈夫？」と、ことあるごとに聞かれます(普通に生活している分には全く問題ないですが)。所内でもいくつかの国の人が集まれば、日韓関係を含めお互いの国の文化や政治の比較でしばしば話が盛り上がりまます。そういった会話ではその国の事情や背景が知れて面白い、一方で深い部分での価値観や考え方の違いを肌で感じるがあります。そのような違いはあまりに根本的なので、日韓がそうであるように外交問題での議論が平行線を辿るのはある意味当たり前のように感じます。しかし一旦科学のテーブルに着くと話は別で、我々は無条件に“楽しく”議論を深めていくことができます。それは科学の議論の背景には、自然法則やそれらの記述方法という概念の共有があるからかも知れません。例えば海外の学会に行けば、どこぞの出身かも知らない初対面の方とも深く議論ができる、科学にはそういった“楽しさ”があることはこちらに来て改めて(なんとなく)認識しています。

このコラム執筆にあたって前号のコラムを読みながら、自分がこの世界に足を踏み入れようと思ったきっかけはなんだったかと、ふと思い返しました。自分の場合はこれといったきっかけの出来事はなかったけれど、当時の研究室での日常や、修士・博士課程と複数回の観測航海や多くの学会・研究集会に参加させてもらったりする中で、海洋学に携わる“大人達”がとても“楽しそう”に見えたからであったような気がします。博士課程を修了し一研究者として巣立った今、これからはそんな海洋学会の“大人達”の一員として貢献できるよう、日々の研究を“楽しみ”、日々の膨大なメランコリーと格闘しながら成長してけたらと想うところであります。